

# *Ratnāvalī* の誓願二十頌と著者問題

津田 明雅

## 1. はじめに

本稿はすでに発表した拙稿(津田 2010)に基づくものであり、同稿と重複する部分があることをお許し頂きたい。ただし本稿では、前稿で紙幅の都合で割愛せざるを得なかった個所を収録でき、また関連する校訂テキストを稿末に掲載した。またあらたに「誓願」の記述について検討し、*Ratnāvalī* (*RĀ*)にこうした二十頌が組み込まれた意義について、著者問題にまで踏み込んで考察したものである。

ここで扱う誓願二十頌とは、ナーガールジュナに帰せられる *Ratnāvalī* の第 5 章に収められたもので、仏像や仏塔などの前で毎日 3 度唱えるべきものとされる。これには冒頭に懺悔の呪文とでもいうべき七支儀軌があり、続いて菩薩の誓願が述べられる。

この部分のテキストには *Ratnāvalī* のほかに、チベット大蔵経に別出された P no.5428 と no.5928 の 2 つがある。前者は *Ratnāvalī* V-65—87 を抜き出したもので 23 偈からなり、後者は V-65—86 を抜き出したもので 22 偈からなる。ともにテキスト中で *Ratnāvalī* からの抽出であることに触れられ、翻訳者には言及されない。2 つのテキストの情報を以下に示すと、

*Yan lag bdun pa'i cho ga tshigs su bcad pa ñi śu pa* (GVs) (= *RĀ* V-65—87)

\**Saptāṅgavidhi-gāthāviṃśaka*, 『七支儀軌二十頌』

P no.5428(中観部), gi149v2—150v4; D no.4515 (未確認); N no.3419, gi139r7—140v1;

C (未確認); S no.3427, gi175r5—176v5.

*sMon lam tshigs su bcad pa ñi śu pa* (GVp) (= *RĀ* V-65—86)

\**Pranīdhāna-gāthāviṃśaka*, 『誓願二十頌』

P no.5928(雑部), mo299v6—300v8; D no.4388, ño318r4—319r4;

N no.3920, mo292v7—293v7; C ño321r4—322r4; S no.3937, mo372r5—373v3.

(P: 北京版, D: デルゲ版, N: ナルタン版, C: チョネ版, S: 金写本)

両テキストおよび *Ratnāvalī* 中のテキストはほぼ一致し、特に *Ratnāvalī* の読みに変更をせまる読みは得られないが、わずかに異なる部分もある<sup>1</sup>。

*Ratnāvalī* V-65—87 のうち、サンスクリットは V-78d—87 が存在する<sup>2</sup>。漢訳は真諦による『宝行王正論』(大正 1656, pp.504b12—505a1)があり、全偈頌存在する。漢訳はチベット訳およびサンスクリットに意味的にほとんど一致しているが、V-84 のみ倍の量の 5 字 8 句(他は 5 字 4 句)で翻訳されている。

またツォンカパ(Tsoñ kha pa)の *sTobs bzi bśags pa byed tshul* (P no.6084)にも、ここで問題とするテキストの一部、*Ratnāvalī* V-69—85 が引用される<sup>3</sup>。これと先にみた 3 チベットテキストとの異同はすでに示したが<sup>4</sup>、全体としてみれば基準となる *Ratnāvalī* や *GVp* とほぼ一致している。この引用部と *GVp*、*GVs* の各校訂テキストを稿末に掲載した。

チベットの諸目録にも本二十頌の記載があり、9 世紀前半にはすでにこれが *Ratnāvalī* から独立して流通していたことが知れる。

---

<sup>1</sup> 津田 2010: 137.15—138.21.

<sup>2</sup> 校訂テキストは Hahn 1982 を使用。なお、これまで未公開だった中国所蔵の *Ratnāvalī* 写本(完本)の校訂が現在進められており、本稿で扱う部分のサンスクリットに関しても今後全体が明らかになることが期待される: 普倉 2016.

<sup>3</sup> *ibid.*: 42.3—12. 本稿では P, タシルンポ(K, kha219v4—220v5), ショル(Z, kha184v4—185v3), クンブム(Sk, kha220v5—222r1)の 4 版を使用。また、ツォンカパ引用部と全く同じ *Ratnāvalī* V-69—85 を引用するチベット文献が 2 つある: *Bsags sbyañ gi gnad bsduṣ pa yan lag bdun pa'i cho ga* of lCañ skya ñag dbaṅ blo bzañ chos ldan(1642—1714): S0130, 16r8—17r6; *Chos sde chen po rnamṣ su gsuñ pa'i chos spyod kyi rim pa dañ ser smad thos bsam nor gliñ grwa tshañ gi thun moñ ma yin pa'i ñe mkho chos spyod bcas of dKon mchog dpal ldan* (1526—1590 or 1785—1833): S0207, 193v6—195r3. これらはテキストの読みもツォンカパ引用部とほぼ一致し、特に後者は引用の前後の文もツォンカパ引用部と同一である。またツォンカパは *Lam rim chen mo* において、*Ratnāvalī* からとして V-86—87 を引用する: D no.5392, 239r2—239r3. 同じく *Ratnāvalī* からとして V-86—87 を引用するチベット文献に次の 2 つがある: *Byañ chub lam gyi rim pa'i gdams pa'i tshigs su bcad pa kun mkhyen bde lam of lCañ skya ñag dbaṅ blo bzañ chos ldan*: S0464, 142v7—143r1; *Blo sbyoñ ñi ma'i 'od zer of Hor ston nam mkha' dpal* (1373—1447): S0185, 54v2—54v6. これら 2 書の作者はともに V-84cd も引用する: *Sems dpa' chen po glañ ri thañ pa rdo rje señ ges mdzad pa'i byañ chub sems sbyoñ gi gdams pa tshig brgyad mar grags pa'i khrid yig theg chen dga' ston of lCañ skya ñag dbaṅ blo bzañ chos ldan*: S0135, 112v4; *Blo sbyoñ ñi ma'i 'od zer of Hor ston nam mkha' dpal*: S0185, 59r3. (テキストはいずれも ACIP の電子版を参照した)

<sup>4</sup> 津田 2010: 137.22—138.4.

*Rin po che phren ba'i smon lam* | 18 śloka (『デンカルマ』 no.473<sup>5</sup>)

*Rin chen phren ba'i smon lam* | 18 śloka (『パンタンマ』 no.449<sup>6</sup>)

## 2. 内容の考察

*Ratnāvalī* V-65 で次の 20 偈を仏像や仏塔などの前で毎日 3 度唱えるように述べられた後に、V-66—85 の 20 偈がある。これら 20 偈は二つに分かれており、V-66—69 ではいわゆる「七支儀軌」といわれる懺悔の次第が説かれ、V-70—85 では菩薩の誓願が説かれる。V-86 ではその福德が説かれ、V-87 ではそれらが世尊によって説かれたものであると述べられる。2 つのチベット訳のタイトルのうち、『七支儀軌二十頌』の「七支儀軌」とは V-66—69 の内容にあたり、『誓願二十頌』の「誓願」は V-70—85 の内容にあたる。

		七支儀軌	誓願		
<i>RĀ</i> V	65	66—69	70—85	86	87
<i>GVp</i>	0	1—4	5—20	21	22
<i>GVs</i>	0	1—4	5—20	21	—

### 2.1. 『菩提資糧論』、『十住毘婆沙論』との関係

ここで扱う偈頌は *Ratnāvalī* V-65—87 の計 23 偈であるが、これらと類似した記述が同じくナーガールジュナに帰せられる『菩提資糧論』(大正 1660, 『菩提資』)<sup>7</sup>にみられる。前者は一部サンスクリットが得られるが後者は漢訳しかなく、テキストの対照には限界があるけれど、両者を比較すると、特に *Ratnāvalī* V-69 と『菩提資糧論』55(これまでに指摘なし)、*Ratnāvalī* V-86 と『菩提資糧論』59(すでに瓜生津氏が指摘<sup>8</sup>)はほぼ一致しているといえる。また、七支儀軌を扱う V-66—69 は『菩提資糧論』50—57 と内容的に類似する点が多い。また大野法道氏が指摘するように、『菩提資糧論』50—59 は『十住毘婆沙論』(大正 1521, 『十住』)の偈頌部分と

<sup>5</sup> Lalou 1953: 330.9—10.

<sup>6</sup> 民族出版社 2003: 33.15, 川越 2005: 23.27.

<sup>7</sup> 偈頌番号は津田 2006: 418—420 のもの。ここで扱った『菩提資糧論』50—59 は大正 1660, pp.530c4—531b6 の偈頌部分に相当する。

<sup>8</sup> 瓜生津 1985: 36.4—10.

もよく一致する<sup>9</sup>。

以下には、『菩提資糧論』55 と *Ratnāvalī* V-69、『菩提資糧論』59 と *Ratnāvalī* V-86 の各テキストと和訳を併記し、また『菩提資糧論』と *Ratnāvalī* V-65—87 との偈頌の一致を、『十住毘婆沙論』の偈頌部分とも対照させて表にした。

若我所有福、悉以為一擲、廻與諸衆生、為令得正覺 『菩資』 55

de ltar bgyis pa'i bsod nams dan || bdag gis bgyis dan ma bgyis gañ ||

des ni sems can thams cad kyañ || bla med byañ chub sems ldan śog | *RĀ* V-69

このようになされた福德や、私になした、またなさなかつたところのそれ(福德)によって、あらゆる命あるもの(\*sattva)もまた、この上ないさとの心をもちますように。

一時所作福、若有形色者、恒沙数大千、亦不能容受 『菩資』 59

yad evaṃ vadataḥ puṇyaṃ yadī tan mūrṭi-mad bhavet |

gaṅgāyāḥ sikatākhyeṣu na māyāl loka-dhātuṣu || *RĀ* V-86

de skad brjod pa'i bsod nams gañ || gal te de ni gzugs can gyur ||

gañ gā'i bye ma sñed kyi ni || 'jig rten khams su'añ śoñ mi 'gyur || *RĀ* V-86

このように述べる者には福德が [ある] が、もしそれが形あるものであればガンジス河の砂 [の数] ほどの [多くの] 世界(loka-dhātu)のなかにも取まりきらないだろう。

『菩資』	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
『十住』	p.45a24-29	c21-22	c23-24	46a23-24	a25-26	b9-10	c14-15	c16-17	47b7-8	b15-16
<i>RĀ</i> V	(V-67)	(68)	(68)	—	(67)	69	(67,68)	(67)	(65)	86

\*()の数字は一部共通する内容をもつ偈頌の番号。

## 2.2. 七支儀軌に関して

七支儀軌に関しては白寄顕成氏の分類があり、それにしたがって以下の考察を試みたい。同氏によれば *Ratnāvalī* での七支儀軌とは次の7つであるという<sup>10</sup>。(チベ

<sup>9</sup> 大野 1932: 40 表, 瓜生津 1981: 109—110, 瓜生津 1985: 34.10—36.6.

<sup>10</sup> 白寄 1990: 40.15—42.2. 七支儀軌の展開に関しては同稿に詳しい。

ット語は *Ratnāvalī* V-66—69 のもの、\*を付けたサンスクリットは白寄氏によるもの。) )

1. 帰依(skyabs mchis, \*śaraṇagamana)
2. 供養(mchod, \*pūjanā)
3. 礼拝(phyag 'tshal, \*vandanā)
4. 罪惡懺悔(懺悔)(sdig pa las ni ldog bgyid, \*pāpadeśanā)
5. 隨喜(rjes su yi rañ, \*anumodanā)
6. 勸請(gsol, \*yācanā; 筆者注: 請轉法輪と請住世を含む)
7. 發菩提心(回向)(byañ chub sems ldan, \*bodhicittotpāda)

これらのうち「勸請」に関して白寄氏は、*Ratnāvalī* V-68 「では請轉法輪がとかれている。しかし、普通「請轉法輪」の場合は、*adhyeṣaṇā*(bskul ba)が使われるのに、ここでは *yācanā*(gsol ba)が使われている」とする<sup>11</sup>。確かに仏に轉法輪を請う「請轉法輪」に対しては *adhyeṣaṇā* の語が用いられ、*yācanā* が用いられるのは仏が世にとどまることを願う「請住世」に対してである<sup>12</sup>。しかしここでは両者が説かれているのだから、後者に対して *gsol*(*yācanā*)が用いられ、前者に対する *bskul ba*(*adhyeṣaṇā*)は省略された、あるいは両者がまとめられて *gsol* という語で表わされた、とみる方がよいだろう<sup>13</sup>。いずれにせよ重要なのは、ここで「請轉法輪」と「請住世」がともに説かれていることである。

これら七支に関連する個所を『菩提資糧論』や『十住毘婆沙論』と比較してみると、次のようになる。

*Ratnāvalī* V-65 の「毎日 3 度唱えなさい」という記述が『菩提資糧論』58 の「晝夜各三時、合掌如是作」という記述と類似している。ただし、礼拝の回数に関しては日に 3 度と 6 度で異なる<sup>14</sup>。

<sup>11</sup> 白寄 1990: 41.17—18.

<sup>12</sup> *Bodhicaryāvatāra* III-4, 5 では、それぞれ仏の轉法輪を願う *adhyeṣaṇā* と仏の久住を願う *yācanā* とが説かれている。La Vallée Poussin 1901—14: 76.11—77.2, Vaidya 1960: 37.29—38.7. この点は宮崎泉准教授(京都大学, 当時)にご教示いただいた。記して感謝したい

<sup>13</sup> *bdag gi spyis btud thal sbyar te || chos kyi 'khor lo bskor slad dañ ||*

*'gro gnas bar du bžugs slad du || rdzogs pa'i sañs rgyas rnam la gsol ||* V-68

私は頭 [を下げ] て礼拝し、合掌して、法輪を回してくださるように、そして世界の万象の [住む] 場所の中にとどまってくくださるように、完全にさとった方々(仏)に請願します。

<sup>14</sup> 礼拝の回数に関して、『佛說舍利弗悔過經』(大正 1492)では「晝夜各當三過稽首」(p.1091a4)、「晝夜各三稽首」(p.1091a18—19)、「不如持悔過經晝夜各三過誦一日」(p.1091b8—9)という記

また礼拝の場所に関して、比丘自在に帰せられる『菩提資糧論』の注釈部分では、これは「如来塔所」や「像所」でなされるべきであるとされ、*Ratnāvalī* V-65 の「[仏]像 [や] 仏塔の前であれ、あるいは他の場所であれ」と共通している。

*Ratnāvalī* V-67 では「悪事に背を向け」という「懺悔」と「すべての人々の福德のすべてに欢喜します」という「随喜」の 2 点がみられるが、「懺悔」が『菩提資糧論』50, 56, 57 にそれぞれ「陳説我不善」、「悔過」、「説悔我罪惡」としてみられ、「随喜」が『菩提資糧論』54, 56, 57 でそれぞれ「聖人及凡夫、…、所有積聚福、我皆生随喜」、「随喜福」、「随喜福」としてみられる。

*Ratnāvalī* V-68 の仏に転法輪を請う点と世にとどまることを願う点が、『菩提資糧論』51 と 52 にそれぞれ「我請転法輪」、「勸請住」と説かれる。また『菩提資糧論』56 にも「勸請」という語がみられる。

*Ratnāvalī* V-69 では「発菩提心」が説かれるが、先にも確認したように、この偈は『菩提資糧論』55 と一致する。

まとめると、*Ratnāvalī* と『菩提資糧論』、および後者と問題の箇所がよく一致する『十住毘婆沙論』の 3 書では、「4.懺悔」、「5.随喜」、「6.勸請(請転法輪と請住世)」、「7.発菩提心」に関して共通した記述がみられる。これら 4 つは「四悔」といわれる<sup>15</sup>。

「1.帰依」、「2.供養」、「3.礼拝」に関しては、『菩提資糧論』ではわずかに第 1 偈に「合掌而頂敬」(p.517b11)、第 164 偈(p.540c15—16)と第 165 偈(c23—24)に「供養」の語がみられるが、これらが先述の四悔と関連付けられているとはいえない。

『十住毘婆沙論』では先の四悔を説いた部分およびその直前に「礼、合掌礼、稽首礼、頭面礼、帰命、合掌恭敬心」(pp.42a16—c7, 43a13—44c5, 45c24, 47b8)や「供養」(pp.43b13, b17, 44b25)の語がみられ、七支の要素が含まれているといえるが、「1.帰依」、「2.供養」、「3.礼拝」の 3 つが明確に区別されているとはいえない。

---

述の他に「各當日三稽首為十方現在諸佛作礼」(p.1090c1—2)というものもある。『十住毘婆沙論』にも「日日於三時、供養十方仏」(p.43b16)とある。このことから考えると、通常は日に 6 度であるが、実際に略式として日に 3 度の礼拝が認められていたか、あるいは表現上の省略として日(昼)に 3 度とだけ記す場合があったと推測される。ちなみに *Ratnāvalī* の漢訳では「日夜各三遍」となっており、『菩提資糧論』と一致する。

<sup>15</sup> 瓜生津 2004: 288.11—293.9. なお、『菩提資糧論』と『十住毘婆沙論』において「懺悔、勸請、随喜、回向」の四悔が説かれる点は、すでに静谷 1970: 80 上 9—12 において指摘されている。

また七支の順序に関しても、『菩提資糧論』と『十住毘婆沙論』のいずれも *Ratnāvalī* の順序とは異なる。『菩提資糧論』では、まとまっているのは4支のみであるが「4.懺悔」、「6.勸請」、「5.随喜」、「7.発菩提心」の順である。すなわち、第50偈—55偈にかけて懺悔(50)、請転法輪(51)、請住世(52)、随喜(53—54)、発菩提心(55)が説かれ、第56偈および第57偈でそれらがまとめられて「悔過、勸請、随喜、回向菩提」(56)、「説悔我罪惡、請仏、随喜、回向菩提」(57)とされる。『十住毘婆沙論』では、阿弥陀仏などの諸仏に「礼拝、合掌、帰命、供養」等を行うという記述の後に、先の表にあげたように『菩提資糧論』に一致する記述が続く<sup>16</sup>。ここでも「4.懺悔」、「6.勸請」、「5.随喜」、「7.発菩提心」の順は確認できるが、「1.帰依」、「2.供養」、「3.礼拝」の順は意識されているとはいえない。このように『菩提資糧論』と『十住毘婆沙論』においては7つの順序が確立しているとはいえず、作者が七支を意識していた可能性は低いといえよう。白寄氏によれば文献上で「七支」の呼称が確認できるのは7世紀以降であり<sup>17</sup>、それ以前はむしろこうした四悔とか、「懺悔、随喜、勸請」の三品として広く知られていたようである。

四悔の順序が異なっている点は注目され、次のような静谷氏の発達順とする分類

1. 懺悔, 随喜, 勸請
2. 懺悔, 随喜, 勸請, 回向
3. 懺悔, 随喜, 勸請, 回向, 発願
4. 懺悔, 勸請, 随喜, 回向
5. 懺悔, 勸請, 随喜, 回向, 発願<sup>18</sup>

によれば、*Ratnāvalī* にみられる四悔「懺悔、随喜、勸請、回向」は、第2番目の『菩薩藏経』(大正 1491)や『大乘三聚懺悔経』(大正 1493)などのそれと共通しており、『菩提資糧論』と『十住毘婆沙論』の四悔「懺悔、勸請、随喜、回向」は第4番目の『大乘集菩薩学論』(大正 1636)のものと共通している。四悔の「順序の変わった理由は不明」<sup>19</sup>とされる。

興味深いことに、『十住毘婆沙論』の散文部分には『三支経』という經典からの

<sup>16</sup> 『十住毘婆沙論』に阿弥陀仏の名が出てくる点は、*Ratnāvalī* や『菩提資糧論』と異なる。

<sup>17</sup> 白寄 1990: 38.34—39.20.

<sup>18</sup> 静谷 1970: 79 下 20—80 上 15.

<sup>19</sup> *ibid.*: 80.上 12.

引用がある。この引用部分は、『菩薩藏經』あるいは『大乘三聚懺悔經』に、完全には一致しないけれど、同様の記述がみられ、これらがその『三支經』に相当するといわれる<sup>20</sup>。

如『三支經』除罪業品中説。「佛告舍利弗。若善男子善女人以滿恒河沙等三千大千世界七寶布施諸佛。若復有人勸請諸佛轉法輪此福為勝。」(『十住毘婆沙論』大正 1521, p.47b20—22)

舍利弗。若善男子善女人三千大千世界布滿七寶布施如來。若善男子善女人前勸請功德勝此功德無量無邊。舍利弗。若恒河沙等世界布滿七寶布施諸佛。若善男子善女人前勸請功德勝此功德無量無邊。... 我已如是勸請諸佛為轉法輪。(『菩薩藏經』大正 1491, p.1088c4—13)

佛告舍利弗。且置三千大千世界滿中七寶。如是東方南西北方四維上下。諸世界中滿中七寶。持用布施諸佛如來。其所得福寧為多不。... 能作如是勸請諸佛轉於法輪。舍利弗。如此福聚比前福聚。百分不及一。千分百千分不及一。乃至算數譬喩所不能及。(『大乘三聚懺悔經』大正 1493, pp.1093c26—1094a6)

さらに、『十住毘婆沙論』にはこれら『菩薩藏經』や『大乘三聚懺悔經』からと思われる引用が他に 3 箇所あり<sup>21</sup>、したがって『十住毘婆沙論』の引用する『三支經』はこれら 2 經と同系統のものであるといっているのである。しかしながら、『十住毘婆沙論』では偈頌、散文いずれにおいても、『菩薩藏經』や『大乘三聚懺悔經』とは順序の異なる四悔が説かれる。『十住毘婆沙論』の作者はなぜ四悔の順序を変えたのだろうか。あるいは後代の加筆があるのだろうか<sup>22</sup>。

<sup>20</sup> 平川 1990: 116.4—117.3, 白寄 1988: 138.12—22.

<sup>21</sup> 釈舎 1968: 104.note24 に指摘される: 1) 『十住毘婆沙論』 p.45b18—c19, 『菩薩藏經』 p.1087a23—b29, 『大乘三聚懺悔經』 pp.1091c11—1092b27; 2) p.46a13—21, p.1088b20—c2, p.1093b24—c20; 3) p.48b4—18, p.1087c3—16, p.1092b29—c15.

<sup>22</sup> 加筆者としてまず疑われるのは翻訳者の鳩摩羅什(あるいは筆記者の僧叡ら)であろうが、もしそうであれば、彼は『十住毘婆沙論』の特に「除業品」全体を、かなり大幅に改編した、ないし自ら著わしたことになる。一方で彼の訳による『大智度論』では *Ratnāvalī* と同じ順で三品を説く: 大正 1509, pp.110a2—10, 495b9—11. したがって『十住毘婆沙論』と『大智度論』は、作者がもともと異なっていた可能性が高まる。また『菩提資糧論』との関係も考慮する必要がある。『十住毘婆沙論』は『菩提資糧論』を数度にわたって引用(八力 1992: 133 表)するため、偈頌部分と散文部分の関係も考慮する必要はあるけれど、『菩提資糧論』は『十住毘婆沙論』に先行する可能性がある。



ちなみに『大乘集菩薩学論』では、おそらく作者の言葉として、「三聚者、謂懺悔勸請隨喜福等」(p.130b6)とあるほか、「而說頌曰」として「又復若自他、同修於懺悔、勸請佛世尊、及隨喜福業」(p.144a22—23)とある。しかしながら、サンスクリットでは順序が異なり、 兩個所ともに「懺悔、隨喜、勸請」である点は要注意である。チベット訳もサンスクリットに一致する。

三聚者、謂懺悔勸請隨喜福等 (大正 1636, p.130b6)

tatra trayaḥ skandhāḥ pāpa-deśanā-puṇyānumodanā-buddhādhyeṣanākhyāḥ puṇya-rāṣitvāt |

(Bendall 1902: 290.2)

de la phuṅ po gsum ni sdig pa bśags pa daṅ | bsod nams kyi rjes su yi raṅ ba daṅ |

saṅs rgyas la bskul ba źes bya ba ste bsod nams kyi phuṅ po yin pa'i phyir ro ||

(P no.5336, ki185v1—2; D no.3940, khi159r4—5)

又復若自他、同修於懺悔、勸請佛世尊、及隨喜福業 (大正 1636, p.144a22—23)

pareṣām ātmano vāpi sāmānyā pāpa-deśanā |

puṇyānumodanā cāivam buddhādhyeṣana-vācanam || (Bendall 1902: 361.1—3)

bdag la phrag dog go skabs med || sdig pa bśags(D, bśad P) par bya ba daṅ ||

bsod nams rjes su yi raṅ daṅ || sans rgyas bskul daṅ gsol gdab pa || (P ki223v5, D khi193r3—4)

管見の限り、「懺悔、勸請、隨喜」の順で説くテキスト<sup>23</sup>はすべて中国で翻訳あるいは作成されたものであり、サンスクリットやチベット訳のテキストはない。静谷氏は「中国で用いられた 4、5 の系統は、当初の姿からすれば、いささか異端の系

<sup>23</sup> 唐的那提訳『離垢慧菩薩所問礼仏法経』(大正 487), 東晋の仏陀跋陀羅訳『仏説観仏三昧海経』(大正 643), 智顛作『法華三昧懺儀』(大正 1941), 善導作『往生礼讃偈』(大正 1980): 静谷 1970: 80 上 9—15. そのほか『菩薩五法懺悔文』(大正 1504)でもこの順で五悔が説かれる。「失訳人名今附梁録」とされ、漢訳者は不明。また、袴谷憲昭氏(袴谷 2002: 160.note2)が指摘する『金光明経』とそれに関連するテキストにもこちらの系譜に含まれるものがある。次の個所に先の順で四悔あるいは五悔が説かれる: 宝貴編纂『合部金光明経』(大正 664) p.369b12—15, 義浄訳『金光明最勝王経』(大正 665) pp.414c28—415a3, 416a8—9, 19; 吉蔵作『金光明経疏』(大正 1787) pp.161b2, 163b11—12. ただし、『合部金光明経』でも p.370c5—6 では懺悔、隨喜、勸請の順となっているし、最古の翻訳である曇無讖訳『金光明経』(大正 663)では、懺悔は説かれるが四悔としてまとめたものは確認できない。

統と言わざるをえない」<sup>24</sup>と述べるが、もし三品をこの順とすることが中国で発生したのであるならば、そのことは『十住毘婆沙論』と『菩提資糧論』の著者問題に関して重大な影響をもつことになり、慎重な検討を要する。

### 2.3. 誓願に関して

*Ratnāvalī* V-70—85 では誓願が説かれるが、それは菩薩から衆生に向けての誓願であり、例えば、浄土經典の『無量寿経』に出てくる法蔵菩薩(のちの阿弥陀仏)の四十八願に形式的には類似したものである<sup>25</sup>。誓願の内容もいくつか類似する箇所があり、それらを以下に挙げると、

*Ratnāvalī* V-70: あらゆる命あるものが欠点のない感覚器官を完備し [ますように。]

『無量寿経』第 40 願: もしも私が菩提に到達したとき、他の仏国に生まれた菩薩たちが、その私の名を聞いても、感官の能力に欠陥があるようであったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。 (山口ほか 1988: 32.15—33.1)

*Ratnāvalī* V-72: あらゆる女性がいつもすばらしい男性となりますように。

『無量寿経』第 35 願: もしもすべて [のかの女性たち] が、[この世での] 生涯を離れてのち、再び女性の身を得るようであったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。 (*ibid.*: 31.11—13)

*Ratnāvalī* V-73: 身体をもつ者(人々)が [美しい] 色を備え・・・長寿でありますように。

『無量寿経』第 3 願: もしも私の仏国に生まれた有情たちがすべて、一色、すなわち金色でないようであったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。 (*ibid.*: 22.14—15)

『無量寿経』第 14 願: 有情の寿命の長さが有限であったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。 (*ibid.*: 25.7—10)

*Ratnāvalī* V-76: [32 の] 特徴と [80 の] 副次的特徴を輝かせ [ますように。]

---

<sup>24</sup> 静谷 1970: 80 下 2—3.

<sup>25</sup> 藤田 2007: 515.18—516.3.

『無量寿経』第20願: もしも私が菩提に到達したとき、かの仏国に生まれるであろう菩薩たちがすべて、偉大な人のみのもつ<sup>32</sup>の特相を[身に]そなえているようでなかったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。

(*ibid.*: 27.1—3)

*Ratnāvalī* V-80: 私を見、心に思い、ただ名を聞くことによって、あらゆる人々が清らかで混乱せず平静で、完全なさとりを確立し[ますように。]

『無量寿経』第43願: もしも私が菩提に到達したとき、その[仏国より]他のもろもろの仏国にいる有情たちが、私の名を聞いて、それを聞いたことにもなる善根によって、[やがて]菩提[の座]をきわめるにいたるまで、[常に、彼ら]すべてに、菩薩の行を歓喜する善根が身につくようでなかったら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。( *ibid.*: 33.12—15)

*Ratnāvalī* V-81: すべての生涯に従った5つの神通力を獲得しますように。

『無量寿経』第5—9願: もしも私の仏国に生まれた有情たちがすべて、神足通、宿命通、天眼通、天耳通、他心通を得ないならば、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。(取意, *ibid.*: 23.4—24.7)

また七支儀軌に続いて誓願が述べられるという形式は、いわゆる『普賢行願讃』にみられ<sup>26</sup>、*Ratnāvalī*の二十頌はこうしたものの影響を受けているといえよう。

ところで、『普賢行願讃』には阿弥陀仏(無量光仏)の名が出てくるが<sup>27</sup>、一方、阿弥陀仏の登場する『無量寿経』では、第21願に普賢行への言及がある。

『無量寿経』第21願: もしも私が菩提に到達したとき、かの仏国に生まれるであろう有情たちがすべて、この上ない完全な正覚に[赴くべきものであり、迷いの世界に]縛られているのはもはやこの一生だけであるということにならないようであつたら、そのあいだは、私はこの上ない完全な正覚をさとることはないであります。[ただ]大いなる[誓願

<sup>26</sup> 『普賢行願讃』の梵本を漢訳と対照させたものに、足利 1956 がある。

<sup>27</sup> 『普賢行願讃』の懺悔(悔過行)と阿弥陀仏土への往生を願うこと(誓願)とのかかわりについては、『無量寿経』との共通性にも触れながら、釈舎氏が考察する: 釋舎 1975, 釋舎 1977.

の] 鎧を身にまとい、すべての世間の利益のために [鎧を] 身にまとい、すべての世間の利益のために専心し、すべての世間を完全に涅槃せしめるよう専心し、すべての世界において菩薩の行を実践しようと欲し、すべての仏たちを尊崇しようと欲し、ガンガー [河] の砂 [の数] に等しい有情たちをしてこの上ない完全な正覚に向けて安定せしめ、そしてさらにそれ以上の行をこころざしており、普賢の行 [を] 実践すること] に定まっているかの菩薩摩訶薩たちの、特別にすぐれたもろもろの誓願 [によって、あえて輪廻を重ねるばあい] は除いて、であります。(山口ほか 1988: 27.4—13)

このように『普賢行願讃』と『無量寿経』には阿弥陀仏と普賢行という共通項がある。一方で、*Ratnāvalī* の二十頌には阿弥陀仏に関連する言及はなく、この点では両書と異なる。

さらに『十住毘婆沙論』と比較すると、同書には礼拝などの対象として阿弥陀仏(無量光仏)の名が挙げられ、その後に四悔が続くなど、『普賢行願讃』により近い記述がみられる。したがって *Ratnāvalī* は『十住毘婆沙論』とも、阿弥陀仏の受容の点で異なっているといえる。

### 3. *Ratnāvalī* の著者問題

最後にまとめにかえて、*Ratnāvalī* の著者問題について考察したい。

そもそも七支儀軌とは、袴谷憲昭氏の言葉を借りれば、「悪業払拭の儀式」であり、犯した悪業を今生のうちに帳消しにしてしまうための儀式である<sup>28</sup>。これは仏教誕生以前からあるインドの習俗に根ざしたものであり、純粋な仏教思想とはいえないものであるけれど、大乘仏教との関わりが深いとされる<sup>29</sup>。

*Ratnāvalī* の二十頌はこの七支儀軌と誓願が組み合わされたものであるが、全体としてみれば「悪業払拭」のための儀礼文にすぎない。さらに *Ratnāvalī* 5章全体としてみた時、前半部の V-2—34 で 57 の罪過(*doṣa*)が列挙され、後半部で本二十頌の読誦が勧められており、章題としてはチベット訳や漢訳では「菩薩の行の章

<sup>28</sup> 袴谷 2002: 149—163. 仏教における「懺悔」の意味について考察したものに、壬生 1975 がある。

<sup>29</sup> 袴谷 1991: 143.1—148.1, 袴谷 2002: 148ff. 初期仏教の経典にも業の除去や悪業の報いを来世まで持ち越さないという記述がある: 榎本 1989.

(Byaṅ chub sems dpa'i spyod pa'i le'u, 出家正行品)」とされるけれど、まさに「大乘における悪業払拭のための章」の様相を呈している。

こうした二十頌を仏塔などの前で唱えることを勧めるという点、特に七支儀軌の実践は、袴谷氏の述べるようなインドの通俗的な側面を表わしており、ナーガールジュナがはたしてこのような側面を受け容れていたのかどうかは非常に疑わしい。ナーガールジュナの代表作とされる『中論』では釈尊の教説の核心部分、すなわち縁起について徹底して説かれており、*Ratnāvalī* にみられるような通俗的な面は皆無に等しく、その実践が勧められることはない。同氏は大乘仏教に次のような2つの側面を見いだされたが<sup>30</sup>、

(a) 事実としては仏教史の大勢を占めることになったが、論理的には仏教の正しい縁起説を継承しているとはいえない大乘仏教

(b) 事実としては仏教史の大勢を占めることには全くならなかったが、論理的には仏教の正しい縁起説を継承している大乘仏教

これを両書に当てはめると、*Ratnāvalī* が(a)、『中論』が(b)となる。それだけ両書の著作態度は異なっているといえる。

ナーガールジュナが通俗的なものを排し、純粋な仏教思想を徹底的に求めたのであれば、*Ratnāvalī* の真作性には疑義が生じる。すでに *Ratnāvalī* に関しては五島清隆氏より『中論』との仏陀観の違いなどが指摘されており<sup>31</sup>、今回の問題と併せると、著者が異なる可能性が高まったといえるのではなかろうか。

また、本稿で検討した「四悔」の順を考慮すると、*Ratnāvalī* は『菩提資糧論』や『十住毘婆沙論』よりも以前の作といえる。それはつまり、『菩提資糧論』や『十住毘婆沙論』の作者もまた、『中論』の作者とは異なる可能性がある、ということでもある。先にみた、『十住毘婆沙論』において礼拝などの対象に阿弥陀仏の名が挙げられる、という点は、阿弥陀仏への言及のない *Ratnāvalī* や『菩提資糧論』との作者の違いを示す要素といえよう。つまり、『中論』、*Ratnāvalī*、『菩提資糧論』、『十住毘婆沙論』のいずれの作者も異なる、という可能性が考えられるわけである。こうした状況に関しては、「ナーガールジュナ没後 100 年から 200 年の間に、複数の者により著述された龍樹文献群」という五島氏の考え方が非常に示唆に富んでい

<sup>30</sup> 袴谷 2002: 158.18—159.2.

<sup>31</sup> 五島 2008, 五島 2008b, 五島 2009.

る<sup>32</sup>。

## 参考文献および略号

足利惇氏

- 1956 「普賢菩薩行願讚の梵本」『五十周年記念論集』京都大学文学部研究紀要 4, 京都大学文学部, 京都: 1—18.

Bendall, Cecil

- 1902 *Çikshāsamuccaya*, Bibliotheca Buddhica 1, Commissionnaires de l'Académie Impériale des Sciences, St.Pétersbourg.

榎本文雄

- 1989 「初期仏教における業の消滅」『日本仏教学会年報』54: 1—13.

藤田宏達

- 2007 『浄土三部経の研究』岩波書店, 東京.

五島清隆

- 2008 「龍樹の仏陀観—龍樹文献群の著者問題を視野に入れて」『インド学チベット学研究』12: 137—169.

- 2008b 「龍樹の縁起説(1)—とくに相互依存の観点から」『南都仏教』92: 1—26.

- 2009 「龍樹の縁起説(2)—とくに十二支縁起との関連から」『南都仏教』93: 1—37.

- 2013 「インド大乘仏教における偽書・擬託の問題—とくに龍樹の著作を中心にして」『「偽」なるものの「射程」: 漢字文化圏の神仏とその周辺』千本英史編, 勉誠出版, 東京: 18—30.

八力広喜

- 1992 「『十住毘婆沙論』と『菩提資糧論』」『印度哲学仏教学』7: 132—141.

Hahn, Michael

- 1982 *Nāgārjuna's Ratnāvalī, Vol.1, The Basic Texts*, Indica et Tibetica Verlag, Bonn.

---

<sup>32</sup> 五島 2013.

1987 “Das älteste Manuskript von Nāgārjunas Ratnāvalī”, *Studien zur Indologie und Iranistik* 13/14: 77—100.

袴谷憲昭

1991 「十二卷本『正法眼蔵』と懺悔の問題」『十二卷本『正法眼蔵』の諸問題』鏡島元隆、鈴木格禅編、大蔵出版、東京: 133—174.

2002 『仏教教団史論』大蔵出版、東京: esp.148—451.

平川彰

1990 『初期大乘仏教の研究 II』平川彰著作集 4, 春秋社、東京.

川越英真

2005 『dKar chag 'Phang thang ma』東北インド・チベット研究会、仙台.

木村高尉

1980 「梵文三品経について」『大正大学総合仏教研究所年報』2: 27—42.

Lalou, Marcelle

1953 “Les textes bouddhiques au temps du Roi Khri-sron-lde-bcan,” *Journal Asiatique* 241: 313—353.

La Vallée Poussin, Louis de

1901—14 *Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva*, Bibliotheca Indica no.983—1399, Calcutta.

壬生台舜

1975 「仏教における懺悔の語義」『大正大学研究紀要: 仏教学部・文学部』61: 79—85.

民族出版社

2003 *dKar chag 'Phaṅ thaṅ ma / sGra 'byor bam po gñis pa*, 民族出版社, 北京.

望月海慧

2010 「ラトナーカラシャーンティ『経集解説・宝明莊嚴』和訳(6)『身延論叢』15: 1—90.

2016 「Dīpaṃkaraśrījñāna の『種姓誓願』について」『智慧のともしび アビダルマ仏教の展開: 三友健容博士古稀記念論文集』三友健容博士古稀記念論文集刊行会編, 山喜房佛書林, 東京: 747—758.

中御門敬教

2000 「三品の再解釈—大乘仏教文献を中心にして」『印度学仏教学研究』  
49-1: 79—82.

大野法道

1932 「菩提資糧論解題」「菩提資糧論」『国訳一切経 論集部』5, 大東  
出版社, 東京: 35—131.

Pema Tenzin

2002 *Suḥr̥llekha of Ācārya Nāgārjuna and Vyaktapadāṭīkā of Ācārya Mahāmati*,  
Bibliotheca Indo-Tibetica Series 52, Central Institute of Higher Tibetan  
Studies, Sarnath.

普倉 (Phutshang)

2016 「竜樹『宝鬘論頌』梵文写本の初歩報告」『西藏貝葉経研究』2016: 26—36.

塩入良道

1979 「五悔の原始型としての三品経—五悔の形成に関する考察(一)」  
『天台学報』21: 40—46.

白寄顕成

1988 「Jitāri の菩提過犯懺悔註菩薩学次第 (Bodhyāpattideśanāvṛttibodhisattva-  
śikṣākrama)研究 1」『神戸女子大学紀要文学部篇』21-1: 129—168.

1990 「Jitāri の Bodhicittotpādasamādānavidhi 研究 (1)」『神戸女子大学紀要  
文学部篇』23-1: 36—55.

静谷正雄

1970 「三品経と舍利弗悔過経—原始大乘における悔過法の一資料」  
『印度学仏教学研究』19-1: 77—80.

积舎幸紀

1968 「十住毘婆沙論に引用される二つの所問経」『龍谷大学仏教文化  
研究所紀要』7: 100—104.

1975 「滅罪—阿弥陀仏をめぐって」『真宗研究』20: 2—18.

1977 「チベット訳「三種の懺願」について」『日本西藏学会々報』23: 1—5.

津田明雅

2006 『Catuḥstava とナーガールジュナー諸著作の真偽性』博士論文, 京都  
大学.



2010 「*Ratnāvalī* の誓願二十頌について」『印度学仏教学研究』58-2: 137—141.  
瓜生津隆真

1981 「龍樹における菩薩思想と戒」『戒律思想の研究』佐々木教悟編,  
平楽寺書店, 京都: 97—126.

1985 『ナーガールジュナ研究』春秋社, 東京.

2004 『龍樹一空の論理と菩薩の道』大法輪閣, 東京: esp.300.10—306.1.

Vaidya, P. L.

1960 *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of  
Prajñākaramati*, Buddhist Sanskrit Texts 12, Darbhanga.

山口益、桜部建、森三樹三郎訳

1988 『大乘仏典 6: 浄土三部経』中央公論社, 東京, 初版 1976.

*RĀ* *Ratnāvalī*

*GVp* *Prañidhāna-gāthāviṃśaka* (P no.5928)

*GVs* *Saptāṅgavidhi-gāthāviṃśaka* (P no.5428)

『十住』 『十住毘婆沙論』

『菩資』 『菩提資糧論』

大正 大正新修大蔵経

P チベット大蔵経北京版(Peking)

D チベット大蔵経デルゲ版(Derge)

N チベット大蔵経ナルタン版(Narhang)

C チベット大蔵経圆锥版(Cone)

S チベット大蔵経金写本(gSer bris)

K タシルンポ版(bKra śis lhun po), *rJe'i gsuñ 'bum*, vol.2, reproduced  
from the bKra śis lhun po xylographic prints, Śerig Par khañ,  
Dharamsala, 1996?

Z ショル版(Śol par khañ), *rJe'i gsuñ 'bum*, vol.Kha.

Sk クンプム版(sKu 'bum), *The Collected Works of the Incomparable  
Lord Tsong kha pa Blo bzang grags pa*, vol.2, sKu 'bum Byams pa gliñ

Par khañ, sKu 'bum, 2000?

r

recto

v

verso

*ego*

author(Tsuda)'s reading

*\*Prañidhāna-gāthāviṃśaka (=RĀ V-65—86) (P no.5928)*

P mo299v6, D ño318r4, N mo292v7, C ño321r4, S mo372r5 rgyal po la gtam bya ba *Rin po che'i phreñ ba* žes  
bya ba<sup>33</sup> las 'byuñ<sup>34</sup> ba'i s*Mon lam* C321r5, S372r6 *tshigs su*<sup>35</sup> *bcad pa ñi śu pa* bžugs so<sup>36</sup> ||  
D318r5||<sup>37</sup> P299v7 dkon mchog gsum la phyag 'tshal lo<sup>38</sup> ||

0. de phyir sku gzugs mchod<sup>N293r1</sup> rten gyi || spyan śña'am yañ na gžan du'añ ruñ ||  
tshigs su<sup>39</sup> bcad pa ñi śu 'di || ñin gcig bžin yañ dus<sup>S372v1</sup> gsum brjod || (=RĀ V-65)

1. sañs rgyas<sup>P299v8, C321r6</sup> dam chos dge 'dun dañ || byañ chub sems dpa'<sup>D318r6</sup> rnam la  
yañ ||<sup>40</sup>  
rnam kun btud de skyabs mchis<sup>N293r2</sup> nas || mchod 'os rnam la phyag 'tshal lo<sup>41</sup> ||  
(=V-66)

2. sdig pa<sup>42</sup> las ni ldog bgyid ciñ || bsod nams thams<sup>P300r1</sup> cad<sup>S372v2</sup> yoñs su bzuñ<sup>43</sup> ||  
lus can kun gyi bsod nams dag |<sup>C321r7</sup> kun la rjes su<sup>44</sup> yi rañ ño || (=V-67)

3. bdag ni spyi<sup>D318r7</sup> btud thal sbyar te || chos kyi 'khor lo bskor<sup>N293r3</sup> slad dañ ||  
'gro gnas<sup>P300r2</sup> bar du bžugs slad du<sup>45</sup> || rdzogs pa'i sañs rgyas rnam la<sup>S372v3</sup> gsol ||  
(=V-68)

4. de ltar bgyis pa'i<sup>46</sup> bsod nams dañ || bdag gis bgyis dañ ma bgyis gañ ||

---

<sup>33</sup> žes bya ba P, S / om. D, C

<sup>34</sup> 'byuñ P, S / byuñ D, C

<sup>35</sup> tshigs su P, D, C / tshigsu N, S

<sup>36</sup> bžugs so P, D, C / bžugso N, S

<sup>37</sup> || D, N, C, S / || || P

<sup>38</sup> 'tshal lo P, D, C, S / 'tshalo N

<sup>39</sup> tshigs su P, D, C, S / tshigsu N

<sup>40</sup> || P, D, N, C / | S

<sup>41</sup> 'tshal lo P, D, C / 'tshalo N, S

<sup>42</sup> pa P, N, S / pa'i D, C

<sup>43</sup> bzuñ P, N, C, S / gzuñ D

<sup>44</sup> rjes su P, D, C, S / rjesu N

<sup>45</sup> slad du P, D, N, C / sladu S

des ni <sup>C321v1</sup>sems can thams cad kyañ || <sup>D318v1</sup>bla med byañ <sup>P300r3</sup>chub sems ldan śog |  
<sup>N293r4</sup> (=V-69)

5. sems can thams cad dri med dbañ || yoñs <sup>S372v4</sup>rdzogs mi khom kun 'das śiñ ||  
spyod pa rañ dbañ yod pa dañ || 'tsho<sup>47</sup> ba bzañ dañ ldan par śog | (=V-70)

6. lus can dag ni thams <sup>P300r4</sup>cad kyañ || lag na rin<sup>48</sup> chen <sup>C321v2</sup>ñid ldan źiñ<sup>49</sup> ||  
yo byad thams cad <sup>D318v2, N293r5</sup>mtha' yas pa || 'khor ba srid du<sup>50</sup> <sup>S372v5</sup>mi zad śog |  
(=V-71)

7. bud med thams cad dus kun tu<sup>51</sup> || skyes mchog ñid du<sup>52</sup> 'gyur<sup>53</sup> bar śog |  
lus can <sup>P300r5</sup>thams cad rig pa dañ || rkañ par ldan pa ñid du śog |<sup>54</sup> (=V-72)

8. lus can kha dog ldan pa dañ || gzugs <sup>N293r6</sup>bzañ <sup>S372v6</sup>gzi brjid <sup>C321v3</sup>che ba dañ ||  
<sup>P300r6</sup>blta na sdug ciñ <sup>D318v3</sup>nad med dañ || stobs can tshe dañ ldan par śog | (=V-73)

9. thams cad thabs la mkhas gyur te || sdug bsñal kun las thar pa<sup>55</sup> dañ ||  
dkon mchog gsum la gźol bar<sup>56</sup> byed<sup>57</sup> || sañs <sup>S373r1</sup>rgyas <sup>P300r7</sup>chos <sup>N293r7</sup>nor che ldan  
śog | (=V-74)

10. byams dañ sñiñ rje dga' ba dañ || ñon <sup>C321v4</sup>moñs btañ <sup>D318v4</sup>sñoms gnas pa dañ ||  
sbyin dañ tshul khrimś bzod brtson 'grus || bsam gtañ śes rab kyis rgyan<sup>58</sup> ciñ ||

---

<sup>46</sup> bgyis pa'i P, N, S / bgyi ba'i D, C

<sup>47</sup> 'tsho P, N, S / tshor D, C

<sup>48</sup> rin P, D, C, S / rig N

<sup>49</sup> źiñ D, C / bźin P, N, S

<sup>50</sup> srid du P, D, N, C / sridu S

<sup>51</sup> tu P, N, C / du D, S

<sup>52</sup> ñid du P, D, N, C / ñidu S

<sup>53</sup> 'gyur P, N, S / gyur D, C

<sup>54</sup> | D, C / | || P, N, S

<sup>55</sup> pa P, N / ba D, C?, S

<sup>56</sup> bar D, N, C, S / par P

<sup>57</sup> byed P, N, S / bya D, C

<sup>58</sup> rgyan P, N, S / brgyan D, C

(=V-75)<sup>59</sup>

11. tshogs<sup>60</sup> rnams<sup>S373r2</sup> thams<sup>P300r8</sup> cad yoñs<sup>61</sup> rdzogs te || mtshan<sup>N293v1</sup> dañ dpe byad  
gsal ba dañ ||

bsam gyis mi khyab sa bcu dag | rgyun mi 'chad par<sup>C321v5</sup> bgrod par<sup>D318v5</sup> śog |  
(=V-76)

12. bdag kyañ yon tan<sup>62</sup> de dag dañ || gźan kun gyis kyañ brgyan ldan te ||<sup>63</sup> P300v1  
ñes<sup>S373r3</sup> pa kun las grol ba dañ || sems can kun mchog byams pa dañ || (=V-77)

13. sems can<sup>N293v2</sup> kun yid re ba yi || dge ba thams cad rdzogs bgyid ciñ ||  
rtag tu lus can thams<sup>D318v6, C321v6</sup> cad kyi || sdug bsñal sel<sup>64</sup> P300v2 bar bgyid par śog |  
(=V-78)

14. 'jig<sup>S373r4</sup> rten kun na skye bo gañ || su dag 'jigs pas<sup>65</sup> skyo ba de<sup>66</sup> ||<sup>67</sup>  
bdag gi miñ tsam thos pas kyañ || śin tu<sup>N293v3</sup> 'jigs pa med par śog | (=V-79)

15. bdag ni mthoñ dañ dran pa dañ || miñ tsam<sup>68</sup> P300v3 thos pas<sup>69</sup> skye<sup>D318v7</sup> bo kun ||  
<sup>C321v7</sup> rab dañ 'khrug med rnal ma<sup>S373r5</sup> dañ || rdzogs pa'i byañ chub ñes pa dañ || (=V-80)

---

<sup>59</sup> V-75ab is close to 40ab of Nāgārjuna's *Suhrlekhā*.

byams dañ sñiñ rje dag dañ dga' ba dañ || btañ sñoms rtag tu yañ dag sgoms(D', C' bsgom) mdzod cig |  
goñ ma brñes par ma gyur de lta na'añ ||(D' | ) tshañs pa'i 'jig rten bde ba thob par 'gyur || 40

(P nos. 5409 gi76v2—3, 5682(P') ñe285r5—6; D nos.4496(未見), 4182(D') ñe42v3—4; N nos.3400 gi66r6, 3673(N') ñe281v4—5; C(未見), ñe42v2—3(C'); S nos.3480 gi84r2, 3681(S') ñe350r3. Pema Tenzin 2002: 169.7—10.)

<sup>60</sup> tshogs D, C / mtshog? P, N / mchog S

<sup>61</sup> yoñs P, D, C, S / 'oñs? N

<sup>62</sup> yon tan P, D, C, S / yton N

<sup>63</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>64</sup> sel P, N, C, S / bsal D

<sup>65</sup> pas D, N, C, S / pa'i P

<sup>66</sup> de P, N, S / ste D, C

<sup>67</sup> || P, D, C, S / | N

<sup>68</sup> miñ tsam P, N, S / mig tsañ C / mig cañ D

<sup>69</sup> pas P, N, S / pa'i D, C

16. tshe rabs kun tu rjes 'brañ ba'i<sup>70</sup> || mñon śes<sup>71</sup> lña po thob par śog |  
sems can kun la <sup>N293v4</sup>rnam kun tu || rtag <sup>P300v4</sup>tu phan bde bgyid par śog | (=V-81)<sup>72</sup>
17. 'jig rten kun na<sup>73</sup> skye bo<sup>74</sup> gañ || <sup>D319r1</sup>sdig <sup>C322r1, S373r6</sup>pa byed par<sup>75</sup> 'dod gyur pa ||  
de dag thams cad gnod med par || rtag tu cig car zlog gyur cig | (=V-82)
18. sa dañ chu dañ me dañ rluñ || sman dañ dgon <sup>P300v5</sup>pa'i śiñ bzin du<sup>76</sup> ||  
rtag tu sems can <sup>N293v5</sup>thams cad kyis<sup>77</sup> || rañ dgar dgag med spyod <sup>C322r2</sup>par <sup>S373v1</sup>  
śog | (=V-83)
19. <sup>D319r2</sup>sems can rnams la srog bzin<sup>78</sup> phañs || bdag la de dag ches phañs śog |  
bdag la de dag sdig smin ciñ || <sup>P300v6</sup>bdag dge ma lus der smin śog | (=V-84)
20. ji srid sems can 'ga' žig kyañ || gañ du ma grol de srid <sup>N293v6</sup>du || <sup>S373v2</sup>  
de phyir bla na med pa yi || byañ chub <sup>C322r3</sup>thob kyañ <sup>D319r3</sup>gnas gyur cig | (=V-85)<sup>79</sup>

<sup>70</sup> ba'i P, D, N, S / pa'i C

<sup>71</sup> śes P, N, C, S / śas D

<sup>72</sup> This verse is cited in *Bodhimārgapradīpapañjikā-nāma* by Dīpaṃkaraśrījñāna.

de bas na(D om.) don 'di la dgoñs nas | slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyi žal nas |

skye ba kun tu(D du) rjes 'brañ ba'i || mñon par śes pa lña thob nas ||

rtag tu sems can thams cad la || kun tu(D, P du) phan dañ bde ba bya ||

žes gsuñs so || (D no.3948 khi274r2—3, P no.5344 ki316r7—8)

<sup>73</sup> kun na P, D, C, S / kuna? N

<sup>74</sup> skye bo C / skye po P / skya po D / skyes po N, S

<sup>75</sup> par D, C / pa P, N, S

<sup>76</sup> du P, D, N, S / tu C

<sup>77</sup> kyis D, C / kyi P, N, S

<sup>78</sup> bzin C / gzin D / sbyin P, N, S

<sup>79</sup> This verse is cited in *Sūtrasamuccayabhāṣyaratnālokālaṃkāra-nāma* by Ratnākaraśānti and in *Bodhimārgapradīpapañjikā-nāma* by Dīpaṃkaraśrījñāna.

phyugs rdzi lta bu ni rtag tu gžon nu'i sa la gnas pa ni |

ci srid sems can 'ga' žig kyañ || gañ du ma grol de srid du ||

de phyir bla na med pa yis(P yi) || byañ chub thob kyañ gnas gyur cig | (=V-85)

ces sems smon pas na kun tu(D du) bzañ po'i spyod pa'i smon lam mo || (D no.3935 ki301v7—302r1, P no.5331 a351v2—3, 望月 2010: 17.1—5)

'phags pa Klu grub kyis kyañ sMon lam las | (P ||)

ji srid sems can 'dir 'ga' žig | sems can gcig grol ma gyur pa ||

bla med byañ chub thob gyur kyañ || de srid de don spyad(D dpyad) par bgyi ||

žes gsuñs so || (D no.3948 khi286r3—4, P no.5344 ki330v7—8, 望月 2016: 749.11—22)

21. de skad brjod pa'i bsod nams gañ || gal<sup>P300v7</sup>te de ni gzugs can gyur ||  
 gañ gā'i<sup>80</sup> bye ma sñed kyi<sup>81</sup> ni || 'jig rten khams su<sup>82</sup> šoñ mi 'gyur || (=V-86)

slop dpon 'phags<sup>S373v3</sup>pa Klu sgrub kyis mdzad pa |<sup>83</sup> N293v7rgyal po la gtam bya ba *Rin*  
*po che'i phreñ ba* C322r4žes bya ba<sup>84</sup> las<sup>D319r4</sup>'byuñ<sup>85</sup> ba'i s*Mon lam* P300v8gyi<sup>86</sup> tshigs  
 su<sup>87</sup> b*cad pa ñi śu pa rdzogs so*<sup>88</sup> || ||<sup>89</sup>

### 『誓願二十頌』

王に語った『宝の首飾り』という [著作] から [とり] 出された『誓願二十頌』  
 が収められる。三宝に礼拝します。

0. それゆえ [仏] 像 [や] 仏塔(mchod rten)の前であれ、あるいは他の場所であれ、  
 これ [ら] 20 偈を毎日 3 度唱えなさい。
1. 仏と最高の教えと僧団と、菩薩たちにあらゆる所で礼拝し、帰依してから、  
 供養に値する方々(\*arhat)に礼拝します。
2. 悪事に背を向け、あらゆる福德を身に受け、すべての身体をもつ者(人々)の福德  
 のすべてに歓喜します。
3. 私は頭 [を下げて] 礼拝し、合掌して、法輪を回してくださるように、そして  
 世界 [の万象の住む] 場所の中にとどまってくださるように、完全にさとった方々

<sup>80</sup> gañ gā'i D, C / gañgā'i P / gañ ga'i? N / gañ gā S

<sup>81</sup> kyi P, N, S / kyis D, C

<sup>82</sup> khams su P, D, C / khamsu N, S

<sup>83</sup> | D, C / || P, N, S

<sup>84</sup> žes bya ba P, N, S / om. D, C

<sup>85</sup> 'byuñ P, N, S / byuñ D, C

<sup>86</sup> gyi D / byi C / om. P, N, S

<sup>87</sup> thigs su P, D, C / tshigsu N, S

<sup>88</sup> rdzogs so P, D, C / rdzogso N, S

<sup>89</sup> || || P, S / || D, N, C

(仏)に請願します。

4. このように [今] なされた福德や、私が [過去に] なした、またなさなかった(未来になす)ところのそれ(福德)によって、あらゆる命あるもの(\*sattva)もまた、この上ないさとの心もちますように。
5. あらゆる命あるもの(\*sattva)が欠点のない感覚器官を完備し、[八] 難を越え、自立した行いがあり、正しい生活を送りますように。
6. 身体をもつ者(人々)誰もが、手に宝石をもち、あらゆる必需品は限りなく、輪廻の間尽きることがありませんように。
7. あらゆる女性が、いつもすばらしい男性となりますように。身体をもつ者(人々)すべてが、知識と [神通力の] 基礎(神足)を備えた者となりますように。
8. 身体をもつ者(人々)が [美しい] 色を備え、姿美しく、すばらしく輝き、見るに苦しみや病がなく、力を持ち、長寿でありますように。
9. あらゆる [人々が] 手だてに通じ、あらゆる苦しみから解放され、三宝に尊敬をし、仏法という偉大な富を手にしめますように。
10. 親愛と慈悲と喜びと、煩惱を離れた [心] にとどまり(四無量心、四梵住)、施し、戒め、忍耐、努力、瞑想、智慧(六波羅蜜)を備え、
11. 資糧をすべて完備し、[32 の] 特徴と [80 の] 副次的特徴を輝かせ、思慮も及ばない十地を絶えず進みますように。
12. 私もまた、これらやその他すべての福德を備えて、あらゆる罪から離れ、あらゆる命あるものをよく慈しみ、



13. あらゆる命あるもの [が] 望むところの善をすべて完備し、常に身体をもつ者 (人々)すべての苦しみを取り除くことをなしますように。
14. あらゆる世界において、どんな人々であれ怖れにさいなまれる [人々] がただ私の名を聞くことによって、まったく怖れることがなくなりますように。
15. 私を見、心に思い、ただ名を聞くことによって、あらゆる人々が清らかで混乱せず平静で、完全なさとりを確立し、
16. すべての生涯(janman)に従った5つの神通力(超人的能力)を獲得しますように。あらゆる命あるものに対し、いつも常に利益 [をなし] 幸せにしますように。
17. あらゆる世界において悪事をなそうと思っている人々、彼らのすべてを傷つけることなく、常にただちに退かせますように。
18. 地と水と火と風や、薬草や森の木と同様に、常にいのちあるものすべてが、喜んで、遮られることのない行為をなしますように。
19. 命あるものたちにとって [私が] 命のように愛しいもの [になりますように。また] 私にとって彼らが最高に愛しいものになりますように。私において彼ら [の] 悪事(pāpa)が報い [ますように。また] 私の善が残りなく、彼らに報いませすように。
20. 命あるものが、わずかであってもどこにしようと、解脱していない限り、彼 [ら] のために、[私が] この上ないさとりを得たとしても [輪廻に] とどまりますように。
21. このように述べる者には福德があるが、もしそれが形(mūrti)あるものであればガンジス河の砂 [の数] ほどの [多くの] 世界(loka-dhātu)のなかにも収まりきらないだろう。

師である聖なるナーガールジュナがお作りになった、王に対して語った『宝の首飾り』という [著作] から [とり] 出された『誓願二十頌』を終わる。

\**Saptāṅgavidhi-gāthāvimśaka* (=RĀ V-65—87) (P no.5428)

P<sup>gi149v2</sup> 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa *Yan lag bdun* P<sup>149v3</sup> pa'i cho ga tshigs su bcad  
pa ñi su pa || || N<sup>gi139r7</sup>, S<sup>gi175r5</sup> 'phags pa Klu sgrub kyis mdzad pa *Yan lag bdun* pa'i cho  
ga tshigs su<sup>90</sup> bcad pa S<sup>175r6</sup> ñi su pa ||<sup>91</sup> thams cad mkhyen pa la phyag 'tshal lo<sup>92</sup> ||

0. de phyir sku gzugs mchod N<sup>139v1</sup> rten gyi || spyan sna<sup>P149v4</sup> 'am yañ na g'zan du'añ ruñ ||  
tshigs su<sup>93</sup> bcad pa ñi su 'di || ñin re žiñ ni dus gsum brjod || (= RĀ V-65)

1. sañ rgyas dam S<sup>175v1</sup> chos dge 'dun dañ || byañ chub sems dpa' rnam la yañ ||  
rnam kun btud de skyabs P<sup>149v5</sup> mchis nas || mchod N<sup>139v2</sup> 'os rnam la phyag 'tshal lo<sup>94</sup> ||  
(=V-66)

2. sdig pa las ni ldog bgyid ciñ || bsod nams thams cad yoñs S<sup>175v2</sup> su bzuñ ||  
lus can kun gyi bsod nams dag | kun la rjes su yi rañ ño || (=V-67)

3. bdag P<sup>149v6</sup> gi spyis btud thal sbyar te || chos kyi 'khor lo N<sup>139v3</sup> bskor slad dañ ||  
'gro gnas bar du b'zugs slad du || rdzogs pa'i S<sup>175v3</sup> sañs rgyas rnam la gsol || (=V-68)

4. de ltar bgyis pa'i bsod nams dañ || bdag gis P<sup>149v7</sup> bgyis dañ ma bgyis gañ ||  
des<sup>95</sup> ni sems can thams cad kyañ || bla med byañ N<sup>139v4</sup> chub sems ldan śog | (=V-69)

5. sems can thams S<sup>175v4</sup> cad dri med dbañ || yoñs rdzogs mi khom kun 'das śiñ ||  
spyod pa rañ dbañ P<sup>149v8</sup> yod pa dañ || 'tsho ba bzañ dañ ldan par śog | (=V-70)

6. lus can dag ni thams cad kyañ || lag na rin chen ñid ldan žiñ || N<sup>139v5</sup>

---

<sup>90</sup> tshigs su P, N / tshigsu S

<sup>91</sup> || N, S / | P

<sup>92</sup> 'tshal lo P, N / 'tshalo S

<sup>93</sup> tshigs su P, N / tshigsu S

<sup>94</sup> 'tshal lo P, N / 'tshalo S

<sup>95</sup> des P, N / de S

- yo byad thams <sup>S175v5</sup>cad mtha' yas pa || 'khor ba srid du mi zad śog | (=V-71)
7. bud med thams <sup>P150r1</sup>cad dus kun tu || skyes mchog ñid du 'gyur bar śog |  
lus can thams cad rig pa dañ || rkañ par ldan pa ñid du śog | (=V-72)
8. lus can <sup>S175v6</sup>kha dog bzañ ba <sup>N139v6</sup>dañ || gzugs bzañ gzi brjid che ba dañ ||<sup>P150r2</sup>  
blta na sdug ciñ nad med dañ || stobs can tshe dañ ldan par śog | (=V-73)
9. thams cad thabs la mkhas gyur te || sdug bsñal kun las thar pa<sup>96</sup> dañ ||<sup>S176r1</sup>  
dkon mchog gsum la gźol ba dañ || sañs <sup>N139v7</sup>rgyas chos nor che <sup>P150r3</sup>ldan śog |  
(=V-74)
10. byams dañ sñiñ rje dga' ba dañ || ñon moñs btañ sñoms gnas pa dañ ||  
sbyin dañ tshul khriims bzod <sup>S176r2</sup>brtson 'grus || bsam gtan śes rab kyis brgyan ciñ ||  
(=V-75)
11. tshogs rnam thams cad <sup>P150r4</sup>yoñs rdzogs <sup>N140r1</sup>te || mtshan dañ dpe byad gsal ba  
dañ ||  
bsam gyis mi khyab sa bcu dag | rgyun mi 'chad par bgrod par śog | <sup>S176r3</sup> (=V-76)
12. bdag kyañ yon tan de dag dañ || gźan kun gyis kyañ brgyan ldan te ||  
ñes <sup>P150r5</sup>pa kun las grol ba dañ || sems <sup>N140r2</sup>can kun mchog byams pa dañ || (=V-77)
13. sems can kun yid re ba yi || bsam pa thams cad rdzogs <sup>S176r4</sup>bgyid ciñ ||  
rtag tu lus can thams cad kyi || sdug bsñal sel bar <sup>P150r6</sup>bgyid par śog | (=V-78)
14. 'jig rten kun na skye bo gañ || su dag 'jigs <sup>N140r3</sup>pas skye bo de ||  
bdag gi miñ tsam thos pas kyañ || śin tu 'jigs pa <sup>S176r5</sup>med par śog | (=V-79)

---

<sup>96</sup> pa P / ba N, S

15. bdag ni mthoñ dañ dran pa dañ || miñ tsam thos pas <sup>P150r7</sup>skye bo rnams ||  
rab dañ 'khrug med rnal ma dañ || rdzogs pa'i byañ chub ñes pa dañ || (=V-80)
16. tshe <sup>N140r4</sup>rabs kun tu rjes 'brañ ba'i || mñon śes lña po <sup>S176r6</sup>thob par śog |  
sems can kun la rnam kun tu || rtag tu phan <sup>P150r8</sup>bde bgyid par śog | (=V-81)
17. 'jig rten kun la skye bo gañ || sdig pa byed par 'dod gyur pa ||  
de dag thams cad gnod med par || <sup>N140r5</sup>rtag tu cig car zlog gyur <sup>S176v1</sup>cig | (=V-82)
18. sa dañ chu dañ me dañ rluñ || sman dañ dgon <sup>P150v1</sup>pa'i<sup>97</sup> śiñ b'zin du<sup>98</sup> ||  
rtag tu sems can thams cad kyis || rañ dgar dpag med spyod par śog | (=V-83)
19. sems can rnams la srog b'zin phañs || de dag la bdag <sup>N140r6, S176v2</sup>ches phañs śog |  
bdag la de dag sdig smin ciñ || bdag <sup>P150v2</sup>dge ma lus der smin śog | (=V-84)
20. ji srid sems can 'ga' źig kyañ<sup>99</sup> || gañ du ma grol de srid du ||  
de phyir bla na med pa yi || byañ chub thob kyañ gnas <sup>S176v3</sup>gyur cig | (=V-85)
21. de skad brjod <sup>N140r7</sup>pa'i bsod nams gañ || gal te de ni gzugs <sup>P150v3</sup>can gyur ||  
gañ gā'i<sup>100</sup> bye ma sñed kyi ni || 'jig rten khams su'añ śoñ mi 'gyur || (=V-86)
22. de ni bcom ldan 'das kyis gsuñs || gtan <sup>S176v4</sup>tshigs kyañ ni 'di la snañ ||  
sems can khams ni <sup>N140v1</sup>tshad med pa || phan 'dod de ni de <sup>P150v4</sup>'dra 'o || (=V-87)

*Yan lag bdun pa'i*<sup>101</sup> *cho ga tshigs su*<sup>102</sup> *bcad pa ñi śu pa Rin po che'i phreñ ba las*

<sup>97</sup> pa'i N, S / po'i P

<sup>98</sup> du *ego* / dañ P, N, S

<sup>99</sup> kyañ N, S / gyañ P

<sup>100</sup> gañ gā'i N, S / gañgā'i P

<sup>101</sup> pa'i S / ba'i P, N

<sup>102</sup> tshigs su P, N / tshigsu S

'byuñ ba || slop dpon chen po 'phags pa Klu <sup>S176v5</sup>sgrub kyi źal śna nas mdzad pa rdzogs  
so || ||<sup>103</sup>

## 『七支儀軌二十頌』

聖なるナーガールジュナがお作りになった『七支儀軌二十頌』。聖なるナーガールジュナがお作りになった『七支儀軌二十頌』。あらゆることを知る方(一切智者)に礼拝します。

0. それゆえ [仏] 像 [や] 仏塔(mchod rten)の前であれ、あるいは他の場所であれ、これ [ら] 20 偈を毎日 3 度唱えなさい。
1. 仏と最高の教えと僧団と、菩薩たちにあらゆる所で礼拝し、帰依してから、供養に値する方々(\*arhat)に礼拝します。
2. 悪事に背を向け、あらゆる福德を身に受け、すべての身体をもつ者(人々)の福德のすべてに歓喜します。
3. 私は頭 [を下げ] て礼拝し、合掌して、法輪を回してくださるように、そして世界[の万象の住む]場所の中にとどまってくださるように、完全にさとった方々(仏)に請願します。
4. このように [今] なされた福德や、私が [過去に] なした、またなさなかった(未来になす)ところのそれ(福德)によって、あらゆる命あるもの(\*sattva)もまた、この上ないさとの心もちますように。
5. あらゆる命あるもの(\*sattva)が欠点のない感覚器官を完備し、[八] 難を越え、

---

<sup>103</sup> || || P, N / || || S

自立した行いがあり、正しい生活を送りますように。

6. 身体をもつ者(人々)誰もが、手に宝石をもち、あらゆる必需品は限りなく、輪廻の間尽きることがありませんように。
7. あらゆる女性が、いつもすばらしい男性となりますように。身体をもつ者(人々)すべてが、知識と [神通力の] 基礎(神足)を備えた者となりますように。
8. 身体をもつ者(人々)が色美しく、姿美しく、すばらしく輝き、見るに苦しみや病がなく、力を持ち、長寿でありますように。
9. あらゆる [人々が] 手だてに通じ、あらゆる苦しみから解放され、三宝を敬い、仏法という偉大な富を手にしめますように。
10. 親愛と慈悲と喜びと、煩惱を離れた [心] にとどまり(四無量心、四梵住)、施し、戒め、忍耐、努力、瞑想、智慧(六波羅蜜)を備え、
11. 資糧をすべて完備し、[32 の] 特徴と [80 の] 副次的特徴を輝かせ、思慮も及ばない十地を絶えず進みますように。
12. 私もまた、これらやその他すべての福德を備えて、あらゆる罪から離れ、あらゆる命あるものをよく慈しみ、
13. あらゆる命あるもの [が] 望むところの思い<sup>104</sup>をすべて満足させ、常に身体をもつ者(人々)すべての苦しみをとり除くことをなしますように。
14. あらゆる世界において、どんな人々であれ怖れをもつ人々がただ私の名を聞く

---

<sup>104</sup>ここでは *bsam pa* となっているが、P no.5928 でも *Ratnāvalī* チベット訳でも *dge ba* であり、*Ratnāvalī* の漢訳でも「善」(p.504.c9)と訳されており、テキストとしては後者の方が望ましいといえよう。

ことによって、まったく怖れることがなくなりますように。

15. 私を見、心に思い、ただ名を聞くことによって、人々が清らかで混乱せず平静で、完全なさとりを確立し、

16. すべての生涯(janman)に従った5つの神通力(超人的能力)を獲得しますように。あらゆる命あるものに対し、いつも常に利益 [をなし] 幸せにしますように。

17. あらゆる世界において悪事をなそうと思っている人々、彼らのすべてを傷つけることなく、常にただちに退かせますように。

18. 地と水と火と風や、薬草や森の木と同様に、常にいのちあるものすべてが、喜んで、量り知れない行為をなしますように。

19. 命あるものたちにとって [私が] 命のように愛しいもの [になりますように]。 [また] 彼らにとって私が最高に愛しいものになりますように<sup>105</sup>。私において彼ら [の] 悪事(pāpa)が報い [ますように。また] 私の善が残りなく、彼らに報いますように。

20. 命あるものが、わずかであってもどこにしようと、解脱していない限り、彼[ら]のために、[私が] この上ないさとりを得たとしても [輪廻に] とどまりますように。

21. このように述べる者には福德があるが、もしそれが形(mūrti)あるものであればガンジス河の砂 [の数] ほどの [多くの] 世界(loka-dhātu)のなかにも収まりきらないだろう。

---

<sup>105</sup> b句はこのままだとa句と同義となるため適当でなく、テキストの混乱があると考えられる。例えばbdag la de dag ches phaṅs śogとでも訂正しなければならないだろう。対して意味的に違和感のないP no.5928は、*Ratnāvalī*のチベット訳および漢訳にも支持され、こちらの方がテキストとしては望ましいといえる。



22. これ(以上)は世尊によって説かれたもので理由(hetu)もまたここに見られる。  
命あるものの領域(sattva-dhātu)は量り知れない [から] そうした利益の願い  
(hitāsā)もそれと同様 [に無量] である。

『七支儀軌二十頌』という『宝の首飾り』から [とり] 出された [作品]。  
偉大な師である聖なるナーガールジュナ御前がお作りになったものを終わる。

*sTobs bži bsags pa byed tshul* (P no.6084) by Tsoñ kha pa  
(The part of the citation of *Ratnāvalī* V-69—85)

P ga<sup>181v1</sup>, K kha<sup>219v4</sup>, Z kha<sup>184v4</sup>, Sk kha<sup>220v5</sup> de nas bsags pa'i<sup>106</sup> dge ba <sup>Sk220v6</sup> rnambsno ba dañ  
P<sup>181v2</sup> smon lam rnam par dag pas kha bsgyur źin | nam <sup>Z184v5</sup> yañ mi zad par byed pa ni  
mgon po Klu sgrub kyis gsuñs pa ltar bya ste |

4. de ltar bgyis <sup>K219v5</sup> pa'i bsod nams dañ || bdag gis bgyis dañ <sup>P181v3, Sk221r1</sup> ma bgyis gañ ||  
des ni<sup>107</sup> sems can thams cad kyañ || bla med byañ chub sems ldan śog | (=RĀ V-69)

5. sems can thams <sup>Z184v6</sup> cad dri med dbañ || yoñs rdzogs mi khom<sup>108</sup> <sup>K219v6</sup> kun 'das<sup>109</sup>  
śin ||  
Sk<sup>221r2</sup> spyod pa <sup>P181v4</sup> rañ dbañ yod pa dañ || 'tsho ba bzañ dañ ldan par śog | (=V-70)

6. lus can dag ni thams cad kyañ || lag na rin chen ñid ldan źin ||  
yo byad thams cad mtha' yas pa || 'khor ba <sup>K220r1, Z185r1</sup> srid du mi <sup>Sk221r3</sup> zad <sup>P181v5</sup> śog |  
(=V-71)

7. bud med thams cad dus kun tu || skyes mchog ñid du 'gyur bar śog |  
lus can thams cad rig pa dañ || rkañ par ldan pa ñid du śog | (=V-72)

8. lus can kha dog ldan pa dañ || <sup>P181v6</sup> gzugs <sup>K220r2, Sk221r4</sup> bzañ gzi brjid che ba dañ ||  
lta <sup>Z185r2</sup> na sdug ciñ nad med dañ || stobs chen tshe dañ ldan par śog | (=V-73)

9. thams cad thabs la mkhas gyur te || sdug bsñal kun<sup>110</sup> las thar pa<sup>111</sup> dañ ||  
dkon <sup>P181v7</sup> mchog<sup>112</sup> gsum <sup>Sk221r5</sup> la gźol <sup>K220r3</sup> ba dañ || sañs rgyas chos nor cher ldan

---

<sup>106</sup> pa'i K, Z, Sk / ña'i P

<sup>107</sup> ni K, Z, Sk / na P

<sup>108</sup> khom K, Z, Sk / gom P

<sup>109</sup> 'das K, Z, Sk / 'dis P

<sup>110</sup> kun K, Z, Sk / źun P

<sup>111</sup> pa K, Z, Sk / ba P

śog | (=V-74)

10. byams dañ sñiñ rje dga' ba dañ || <sup>Z185r3</sup>ñon moñs btañ sñoms gnas pa dañ ||  
sbyin dañ tshul khirms bzod brtson <sup>P181v8</sup>'grus || bsam gtan <sup>Sk221r6</sup>śes rab kyis<sup>113</sup>  
brgyan ciñ || <sup>K220r4</sup>(=V-75)
11. tshogs rnamś thams cad yoñs rdzogs te || mtshan dañ dpe byad gsal ba dañ ||  
bsam gyis mi khyab sa bcu dag | rgyun <sup>P182r1</sup>mi <sup>Z185r4</sup>'chad par bgrod par śog |  
(=V-76)
12. bdag kyañ <sup>Sk221v1</sup>'yon tan de dag dañ || gźan kun gyis kyañ <sup>K220r5</sup>brgyan<sup>114</sup> Idan te ||  
ñes pa kun las grol ba dañ || semś can kun mchog <sup>P182r2</sup>byams pa dañ || (=V-77)
13. semś can kun gyi bsam pa dañ || dge ba thams cad rdzogs <sup>Sk221v2</sup>bgyid ciñ || <sup>Z185r5</sup>  
rtag tu lus can thams cad kyi || sdug <sup>K220r6</sup>bsñal sel bar bgyid par śog | (=V-78)
14. 'jig <sup>P182r3</sup>rten kun na skye bo gañ || su dag 'jigs pas skyo ba de ||  
bdag gi miñ tsam thos pas kyañ || śin tu <sup>Sk221v3</sup>'jigs pa med par śog | (=V-79)
15. bdag ni mthoñ dañ dran pa dañ || <sup>K220v1</sup>miñ <sup>Z185r6</sup>tsam thos pas <sup>P182r4</sup>skye bo rnamś ||  
rab dañ 'khrug med rnal ma dañ || rdzogs pa'i byañ chub ñes pa dañ || (=V-80)
16. tshe rabs kun tu rjes 'brañ ba'i || <sup>Sk221v4</sup>mñon śes lña po thob par śog |  
semś can kun la rnam kun tu || <sup>K220v2</sup>rtag<sup>115</sup> <sup>P182r5</sup>tu phan bde bgyid par śog | (=V-81)
17. 'jig rten kun <sup>Z185v1</sup>na skye bo<sup>116</sup> gañ || sdig pa byed<sup>117</sup> par 'dod gyur pa ||

---

<sup>112</sup> mchog K, Z, Sk / cog P

<sup>113</sup> kyis K, Z, Sk / gyis P

<sup>114</sup> brgyan P / rgyan K, Z, Sk

<sup>115</sup> rtag K, Z, Sk / rtug P

<sup>116</sup> bo P, Z, K / po Sk

<sup>117</sup> byed K, Z, Sk / bde P

de dag thams cad gnod med <sup>Sk221v5</sup>par || rtag tu cig car bzlog gyur cig | (=V-82)

18. sa dañ chu dañ me dañ rluñ || sman <sup>P182r6</sup>dañ <sup>K220v3</sup>dgon pa'i śiñ bzin du ||  
rtag tu sems can thams cad kyis || rañ dgar gegs<sup>118</sup> med spyod <sup>Z185v2</sup>par śog | (=V-83)

19. sems can <sup>Sk221v6</sup>rnams la srog bzin phaṅs || bdag la de dag ches phaṅs<sup>119</sup> śog |  
bdag <sup>P182r7</sup>la de dag <sup>K220v4</sup>sdiḡ smin ciñ || bdag dge ma lus der<sup>120</sup> smin śog | (=V-84)

20. ji srid sems can 'ga' žig kyañ || gañ du ma grol de srid <sup>Sk222r1</sup>du ||  
de phyir bla na <sup>Z185v3</sup>med<sup>121</sup> pa yi || byañ chub thob kyañ gnas gyur cig | <sup>P182r8</sup>(=V-85)

ces de dag gi don <sup>K220v5</sup>dran bzin pas ma yaṅs<sup>122</sup> par bya ste | smon pa'i gnas rnams la  
'dun pa drag po ñin re <sup>Sk222r2</sup>bzin lan gsum gsum bya'o ||

---

<sup>118</sup> gegs K, Z, Sk / gogs P

<sup>119</sup> phaṅs P, K, Sk / phoṅs Z

<sup>120</sup> der P, K, Sk / dar Z

<sup>121</sup> med K, Z, Sk / mid P

<sup>122</sup> yaṅs P / yeṅs K, Z, Sk